
近未来の駄菓子屋さん

キセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近未来の駄菓子屋さん

【Nコード】

N6595G

【作者名】

キセル

【あらすじ】

当たり前のように車が空を飛び、当たり前のように宇宙船で星々の旅に行ける時代。そんな時代に取り残されたかのような昔ながらの駄菓子屋がそこにはあった。

1 (前書き)

本当は短編で書きたかったんだけど長くなるんで分けました。
暇な時にでも順々に読んで下さい。

「あゝ…暇だ」

店の前を当たり前のように宙に浮き、飛んで行く車を眺め、俺は呟く。

昔はタイヤなんて物がついていて、それで地面を走っていたらしいが今の世の中、そんな物は必要無い。

「暇ですねえ…、店長」

その隣、レジの横でそう言葉を返したのはバイトに雇った少女。

現在東暦133年。

ちよつと前までは西暦〳年とかだったんだがどこぞの麻雀好きな奴が西家より東家だるとかアホな事を言つて暦が変わった。

当たり前のように車が空を飛び、当たり前のように宇宙船で星々の旅に行ける時代なのだ。

…うちにそんな金は一切無いがな。

「流石に…限界だろ、こんなご時世に駄菓子屋なんぞ」

俺はそう言いながら小さな店に並んだ商品を見渡す。

「これなんぞいつ仕入れたかもわからんぞ」

『シャックリマンチョコ』を店の棚からつまみ上げた。

一つ嬉しいのは科学技術の発達により、賞味期限というものがなくなつた事か。

とりあえず棚にちゃんと置いとけば食べ物が腐る心配は無い、機械が適切に保存してくれる。

つまりはうん十年置いても問題無いのだ。

「それはそれでどうかと思いますが…、売れなければ一緒ですし」

「いや、こういう駄菓子ならまだいい、最悪非常食になる、だがこれなんぞ俺も使い方がわからん」

シャックリマンチョコを戻し、かわりに丸い、なんかよくわからん物を取り出した。

「わ〜！めんこじゃないですか！！」

バイトはニコニコの笑顔で俺の持つ丸いやつ（めんこってらしい）を手を取った。

「しかもこれはかなりレアなデカめんこ！！はう…素晴らしいです…」

目の色を輝かせ、うっとり丸いやつ（あえてめんことは言わない）を眺めるバイト。

こいつはどつやらそついったレトログッズのマニアなのだ。

だからうちの店のバイトもほとんど無償でやっているようなものだ。

まあ…変わり者である。

「それレアなのか？」

「はい!!」

「…高値で売れるか？」

「無理です」

即答。。

まあ…わかってはいたが。

「めんこ界ではかなりレアな部類なんですけどね…デカめんこ」

…めんこ界ってなんだ？

「このデカめんこはですね、一見最強でどんなめんこも裏返しに出
来そうなのですが一度防御側になるとチビめんこに簡単に取られて
しまつ…」

「よくするに使えないわけか」

こいつがこのての話しを語り出すと長くなるのでこつらで話しを止
めさせた。

「つまりは…遊び道具か」

「はい！負けたらめんこが取られちゃうんで白熱しますよ！！」

「遊び道具ねえ…、今じゃ超リアルCGが画面から飛び出す、部屋全体がゲーム空間みたいなTVゲームもあるのになあ…」

部屋全体へと飛び出すリアルCGに進化した今のTVゲームにこの紙で出来た丸いやつが勝てるわけがない。

売れないわけだよなあ…。

「あの…店長、私は何をすれば良いのでしょうか？」

遠慮がちにバイトはそう話す。

遠慮がち…というのは本人もわかっているからだ。

スバリ…客が来ないと仕事もくそもない！！

「そうだな…倉庫の整理でもしててくれ」

「はっ！了解しました〜！！」

タタタツとバイトは店の横にある倉庫に駆けていく。

元気な奴だな…。

店の横にポツンと建ててあるこれまた時代遅れな古い倉庫。

中にはいろいろとゴチャゴチャしており、散らかっている。

「はぁ…暇だ」

今日何度そう呟いたか…。

ガガガガガガガガッ

「うるせえなあ…」

店の裏ではよくわからん工事をしている。

かなり大規模な工事なのか最新型の工事機械、ドリトル君を何台も導入している。

金の使われ具合からしてかなりの金持ちが計画していたのか。

ぼーッと外を眺めていると空を浮く黒塗りのリムジンが店先を通る。

「おお…ありゃ最近出たばかりの」

お値段的には手も足も出ない高級車。

ヒュン…。

「…!？」

それが…何故か店の前に止まった。

「…なんだ？」

ビュンツ…と運転席側の自動ドアが開き、黒スーツの男が出てきた。

「……………」

黒スーツはうちの店をじろじろと見渡し、サングラスを外した。

「…社長、やはりここであってます」

そうサングラスに話す黒スーツ、通信機にもなるのね、それ。

「ご苦労様、黒星」

サングラスから返事が返ってくる、不気味だった。

「はっ…」

黒スーツ（黒星という名前っぽい）は車から赤い絨毯を取り出し、しゅるしゅるとしていく。

…ちようど俺の前まで。

「…あの、何かご用でしょうか？」

「静かに…」

「あっ…、すみません」

あれ？何で謝ってたんだろう、何か悪い事したかおい！！

っーか何だコイツ、客か？駄菓子買いに来たのか？

ビュン。

そんな事を考えてると車の後ろ席側の自動ドアが開いた。

赤い絨毯はそこから俺の所までひいてあるのだ。

そこから降りて来たのは…少女、ガキだった。

何故か隣には世界でもトップを争う大企業、トランテクスの開発した最新型のメイドロボまでいやがる。

「…誰？あのガキ」

俺はそのガキを指さし、隣で無言でたたずむ黒星さんに聞いた。

「口を慎め！！」

「す！すいません！！」

何？そんな怒られる事したのか俺は！？

「…！？」

そうか…そうだよな、確かに俺は客に対する態度が悪かった。

客を指さして誰？とかガキとか。

俺がされたらキレる。

思えば接客なんてバイトに任せっぱなしだったからなあ…。

「いらっしゃいませ」

俺はニコリと営業スマイルを作る。

「……………」

少女はキョロキョロと店の中を見渡すと…。

「…汚い場所」

目をつりあげてそう呟く。

ビキッ…。

OK…、大丈夫だ、この程度で怒るほどカルシウム不足ではない。

ピピピピピピッ。

そう考えている中、ガキの隣にいるメイドロボのセンサーが何かに反応しているのか音をたてた。

「建物ノ汚染度が60%ヲ超エテイマス、スミヤカニ清掃スルコトヲオススメシマス」

「うるせー！大きなお世話じゃー！ー！」

爆発した。

「コラガキツ！！いきなり人ん店を貶すな、営業妨害と名誉毀損で訴えんぞー！！」

ガキを指さし、とりあえず怒鳴っとく。

「貴様ツ」

「待ちなさい、黒星」

俺を取り押さえようとしたのが、ガキは黒星さんにそう話す。

「訴える…まあ、私としてはそちらでも構いませんよ？ただ…」

「…ただ？」

ニコリと笑うガキに何か嫌な気配を感じる。

「私の会社を相手にするという事…、でよろしいですか？」

「…はあ？」

ん？そついや何かニュースでやってたな。

世界的大企業、トランテクス社の社長が死んで…その跡をついだのが。

まだ10代の少女だったって…。

「おまつ…、まさか」

俺は口をパクパクとさせた。

「ええ、トランテクスの代表取締役、社長です、よろしくね、この店のオーナーさん」

「…マジ？」

俺は黒星さんを見る、黒星さんはコクンと頷いた。

「マジでか？」

「本気ト書イテマジデス」

メイドロボもそんな事を言っただけ。

「ええっと…んで、その大企業の社長さんがどうしてまたこんなちんけな店に？」

「そうですね…、では単刀直入にいきましょうか」

ガキ…、じゃなくて社長さんはメイドロボから何枚かの書類を受け取る。

「…この場所から立ち退いてもらえませんか？」

…。

…。

…？

「…はい？」

「フッフッフフフーン」

倉庫の掃除を頼まれた彼女は鼻歌混じり、上機嫌に棚を整理している。

なんてったってこの倉庫、古い物の宝庫なのだ。

「あゝ！コマもあるんだ！！」

箱の中からコマを見つけ、喜んでいる。

「あとは…紐でもあれば」

そう呟き、箱の中を探していると…。

「…？」

彼女は四つ折りにされた小さな紙切れを見つけた。

「ん〜と…、ま、いつか、読んじゃえ!!」

少し迷ったが紙切れを開き、中を見る。

「…不知火のまいぞーきん？」

「え…今なんて？」

「だから…立ち退いて欲しいのです、この場所から」

こいつ…いきなり来といて何言い出すんだ？

「…何でまた？」

「そうですね…この店のすぐ近くで工事をしているのはご存知ですか？」

「そら…まあ、音が響いてっからな」

「…防音遮断壁はしていないのですか？」

少女社長は信じられないといった顔をする。

「あいにくと古い建物なんでね」

すっかり防音遮断壁なんて当たり前の時代になったんだなあ…。

「んで、何の工事なんだありゃ？」

「宇宙港ですよ」

宇宙港…名前の通り宇宙船を宇宙に打ち上げ、旅行が出来る場所だ。

同時に地球を自由に行き来できるワープゾーンも兼ねている。

地下のエネルギーを利用した技術らしいのでそこいらの土地じゃ建てれない施設なのだが…。

「この土地は宇宙港を建てるのに適した場所なのです」

「なる…ほど、それでうちの店が邪魔と」

「ええ…その通りです」

キツパリと言ってくれるなこの小娘社長。

「…ん？ちよつと待ってくれ」

「はい？なんででしょうか」

「普通こうい話しは工事が始まる前、つまり計画の段階で出るものじゃないのか？」

「…意外と鋭いんですね」

バカにしとんな、コイツ。

「ええ…、確かにあなたの言う通り、こうい話しは計画の段階で済ませるべきなのですが…」

「…ですが？」

「…ぶつちゃけ、ここまで完全にスルーでした」

「うおいー!!」

ずっこけてしまった…。

「…大企業、トランテクス社の社長がそれでいいのかよ」

「し、仕方がないじゃない!そもそも衛生地図に無いあなたの店が悪いのよ!…」

「…なぬ?」

衛生地図とは宇宙衛生が常に最新のデータを送り、空間モニターに地図を映し出すものだ。

つまり…普通、店は映し出されるはず。

「…見落としたら」

「ち、違います!失礼ですね…」

小娘社長はコホンと一息つく。

「つまり…宇宙衛生がこの建物を『建物』として認識しなかったのでしょうか」

「…は?」

「この建物、今時珍しく…、と言うより今ではまったく見ない木材の建物ですよね?」

「まあ…な」

周りを見渡しても…、いや、テレビを見ても木材の建物なんぞ見ない時代だ。

「それで…宇宙衛生はこの建物を木として映し出していたのです」

「んな!？」

つまり…地図の上ではこの場所はただの木という事になっているらしい。

「それで私達もこの店に気付かず、工事を開始してしまいました」

「…機械に頼りっぱなしで現場見ないからんな事が起きるんだよ(ボソツ)」

「…何か言いましたか？」

「いえ…何も、それで、この場所はどんな有効活用されるんで？」

「ああ、駐車場です」

「……………」

大方、予想ついていた答えだったのが悲しい。

「…冗談じゃねえ」

冗談じゃねえ。

本当にそうだ。

「こちとら極貧ながらも先祖代々の土地、受け継がれて来た店を簡単にホイホイ手離す程落ちぶれちゃ」

「黒星」

小娘社長の合図で黒星さんはマネーカードを取り出す。

現金に変わり、すっかり主流になったのがこのマネーカード。

デジタル面に現在の所持金が表示されており、これさえあれば現金の持ち歩きは必要なく、登録者意外の使用は不可という盗難防止の優れ物。

もちろん、ほぼ全ての店で使用出来る。

…対応機器の無いうちの店以外は、だが。

「…では、そうですね」

小娘社長はピピピと自分のマネーカードと黒星さんからもらったマネーカードを操作する。

今、自分がマネーカードに入れている分の金を移しているのだ。

しかし…、俺が金で釣られる男に見られていたとはな。

見くびられたもんだ。

「…こんなものでどうでしょうか？」

小娘社長が俺にマネーカードを見せてくる。

ふ、ふん…そうだな、一応見といてやるか、この店のオーナーとして。

「もちろん、立ち退き後の住まいなどはこちらで提供させて頂きますよ」

そう言う小娘社長からマネーカードを受け取り、デジタル面に表示されている額を見る。

「OK!」

俺はビシッと親指を立てた。

何とでも言え！生きる為だ!!

「そうですか、それは良かった」

ニコリと微笑む小娘社長を見ると踊らされてる気がするが仕方ない。

「では…早速ですが手続きを」

「…あ！ちよっと待ってくれ!!」

そっぴや忘れてる事があった。

「…はい？」

「いや、…うちにバイトが居るんで、そいつにも一応話しとかな
いよ」

倉庫の整理と掃除を任したバイトを忘れていた。

「ちょっと待っていてくれ、話ししてくるから」

さすがに立ち退く、となったらアイツにも言わねばなるまい。

「あっ…ちょっと!!」

何か言いたげな小娘社長を無視して倉庫に向かった。

「…店をほったらかしにして、お客様が来たらどうするんですか」

「…社長、来ないという確信があったのでは？」

「おゝい!?!」

俺は倉庫で整理をしているバイトに呼び掛けた。

「あつ!店長!?!」

元気よくバイトが倉庫から顔を出す。

とてつもなくニコニコな笑顔だ。

そんな笑顔を見ているとこの店を手離す考えが薄れそうで怖い。

「あゝ…悪いんだがな、ちょっと言いたい事が」

どうしてもバツが悪そうに話してしまう。

「店長!不知火って人を知ってますか!?!」

「…あん?」

俺の話しをきり、突然何を聞くかと思ったら…。

「…?か知らんのか?有名だろ」

「…すみません」

「…たく…、お前よりもっとちっこいガキだって知ってるぞ」

やっぱりコイツはどこか抜けている。

「不知火つていやかつて日本一と言われた財閥の会長だよ」

「財閥…」

「ああ、今じゃ無くなっちまったが」

「無くなっただんですか？」

「月人相手に宇宙で戦争挑んだんだよ、星対個人財閥なんて勝てる訳ねえのによ」

おかげで月との関係も悪くなったって話だし。

「つまり…お金持ちだったんですね？」

「そりゃ星を相手に戦争起こせるぐらいだからな、財閥が解散した今でもあちこちに財産を隠してあるって話だし」

「例えば…これですか？」

バイトがピラツと紙切れを見せてくる。

「倉庫の中で見つけたのですが…」

「ん？不知火の…まい、ぞー…きん？」

…しらぬいのまいぞーきん？

しらぬいの埋蔵金!?

不知火の埋蔵金!!

「マジでかあああああ!!」

慌てて紙切れを見る。

場所も丁度この土地の辺りだ。

「きたあああああ!!」

喜び、ガッツポーズ。

これをもし見つけければ億万長者どころの話ではない。

「でかした!さすがだ!!」

「はい!あつと...、それで店長のお話というのは?」

「...あつ」

そうだ、俺は今、立ち退きの話しをしていたんだ。

もしこのまま俺達が立ち退いたらどうなる...?

おそらく、駐車場を設置する時に不知火のお宝が発見され...

奴等の手に渡ってしまう...?

「いかん…、いかんぞ、それは」

「…はい？」

俺はバイトを連れて慌てて店に戻る。

「あら…案外はやかったのですね」

物珍しそうにけん玉という玩具をいじりながら小娘社長が話した。

「取り消し!!」

「…はい？」

あんぐりと口を開ける小娘社長。

「悪いが俺はここを立ち退かねえ…諦めろ!!」

「なっ…!!?」

「んじゃ…そういう事でお引き取りを」

「ちよっ!ちよっ!と待ちなさい!!」

ポンポンと話しを進めていく俺を小娘社長が遮る。

「先ほどと話しが違うじゃないですか!!」

俺の突然の変更のせいか慌てる小娘社長。

「俺は考え直したんだ…、先祖代々守って来たこの店と土地、そう簡単には手離せない！」

「ッ！…この…」

「社長、落ち着いて下さい」

「…コホンッ」

黒星さんになだめられた小娘社長は一息つく。

「…そうですね、あなたの考えはわかります」

冷静になった小娘社長は先ほどのマネーカードを持ち出し、ピピピと操作し出した。

「…なら、これでどうでしょう？」

差し出されたマネーカード、さっき見た時より更に額が上がっている。

「却下」

だがまあ…不知火の隠し財産にはかなうまいて。

「俺はな、そうやって何でも金で解決しようってのが気に入らねえんだよ…！」

「…！！！」

小娘社長はヒクリと目をつり上げた。

「金で何でも解決出来ると思うなよ」

…出来るけどね。

「ええい！こうなったらこのボロ屋の真ん前に巨大マーケットでも建てて…」

「才嬢様、落ち着イテ下サイ」

取り乱した小娘社長をメイドロボがなだめた。

「ですが…このまま帰る訳には」

「んじゃ、後は任したぜ」

俺はポンツと今までボツと話しを聞いていたバイトの肩を叩く。

「…え！？」

突然のバトンタッチにビクツと反応するバイト。

「あの！私には何の話しかか！！」

「ち、ちよつと！あなた一体どこへ！！」

文句を言いたげな二人を置いて俺は店を飛び出す。

埋蔵金を掘りあてるのだ。

「ムフフ…ようやっと明るい未来が見えて来たぜ」

「ああ…なんて無茶苦茶な人!!」

「行っちゃった…いつもああなんですよね」

「…ところで、あなたは？」

「あ、私ですか？この店でバイトやってます、よろしくね、お嬢ちゃん」

「おじよ…、ちゃん!？」

「くっそ…」

俺は穴を掘っていた。

それはもう必死に。

バイトから不知火の埋蔵金の話を聞いて最初にピンと来た場所があったのだ。

それは倉庫の裏、うちの敷地内で昔から不自然にそこだけ何も無い。

倉庫と壁の間に変な間まがあるのだ。

「あゝ、しんど…」

ザクッ

俺は地面にシャベルを突き刺す。

倉庫から持って来たものだがこんな物今では使っている奴居ないだろなあ…。

「うちも『モグラナーナ』くらい買っときゃ良かったか…」

手動でやるには限界があるもんだ。

だからといって自動で穴を掘ってくれる機械を買う余裕も無い。

「…どうするか」

そう悩んでいる時だった。

「オーナー」

「…ん？」

話しかけて来たのは小娘社長といたメイドロボ。

「才嬢様ガオ呼びビデス、直子ニオ戻リヲ」

どうやら小娘社長に俺を呼ぶように言われたらしい。

「…ったく…、しつこいな、俺はこの土地を手離す気は毛頭」

無い…と言いかける寸前で良いことを思い付いた。

「なあ、戻ってもいいんだがその代わりに、やって欲しい事がある」

「？、何デシヨウ？」

きよとんと首を傾げるメイドロボ、ロボットとは思えないできた。

「ここに穴が空いてるだろ、この穴のもっと深い方に何か反応は無いか見てくれ」

「イエス、了解シマシタ」

そう言つてメイドロボは穴を覗くとセンサーで調べ始める。

「…微力デスガ反応ガアリマス」

俺は心の中でガッツポーズをとる。

「さて…後はどうやって掘り出すか」

「…反応ノアル物ヲ掘り出セバイイノデスカ？」

「そうしてもらえりゃ一番だが…あんたは明らかにそういう作業用じゃ無いだろ」

見た目には華奢な少女の姿なんだよなあ。

「問題ハアリマセン」

そう言つとメイドロボの両手がいきなり引つ込んだ。

「…まさか」

ギュルルツ…と言つ音と共にドリルが両手から出る。

「コレデ宜シイデスカ？」

流星はトランテクスの最高峰のロボットといった所か…。

「あ…、ああ」

「デハ…イキマス」

呆気にとられた俺に一言言い、メイドロボは穴に入る。

シャベルで掘った穴何ぞたいした物では無いので穴を掘るメイドロボの姿が見えた。

「…何か悪いな」

俺の予想だが埋蔵金何ぞはかなり深い所にあるのだろう。

「見ツケマシタ」

…なぬ？

あれ？早くねえか。

「…もう掘り出したのか？」

「反応が浅イ場所ナノデ私ガ掘ル方ガ早イト判断シマシタ」

そう言いながらメイドロボは穴から出てくる。

その手には金属の箱一つ。

「…これだけか？」

「ハイ、浅イ場所デノ微力ナ反応ナノデ」

メイドロボから金属の箱を受けとる。

「ソレデハ、才嬢様ノ所ニ行キマシヨウ」

「あゝ…、先に行つててくれ、後で必ず行くから」

「…了解シマシタ」

「あつ！ちつと待て」

戻ろうとするメイドロボを慌てて呼び止める。

「…ハイ？」

「この事はあの社長さんには黙つててくれよ」

こつちとしちゃ不知火の埋蔵金の事を知られるのはあんまり都合が良くない。

「ソレハ約束出来マセン」

「…何でだ？」

「私ノマスターデアル才嬢様ノ言葉ハ絶対デス」

つまり…聞かれたらきちんと答えるつて事が。

そこら辺は融通がきかないなあ…。

「…何してたか聞かれたら何て答える気だ？」

「当然、コノ店ノオーナーデアル貴方ヲ呼び出シテマシタト答エマ

ス

…やっぱり融通がきいてねえ。

まあ確かにメインはそうなんだろうが。

「OK、すぐに行くって社長さんに言っといてくれ」

「了解シマシタ」

スタスタと店に戻って行くメイドロボ。

「…よし、行っただか」

俺はその姿が見えなくなるのを確認し、金属の箱を地面に置いた。

「さあて…何が入ってんだろな」

一瞬、金属の箱を見た時は啞然としてしまったが。

こうして見れば…なるほど、こちらの方がリアルである。

埋蔵金として隠すならこの方が都合が良いのだろう。

「たぶん、ルナメタルとか相当価値のあるもんが…」

ワクワクしつつ、俺は金属の箱をこじ開けた。

「!?!」

その中に入っていた物、それは…。

「…雑巾？」

名前の欄には『5 2、不知火』と書いてある。

不知火の使ってた雑巾。

不知火のmy雑巾。

不知火の…まいぞうきん。

「ベツツタベタじゃねえかあああああ!!」

雑巾には汚い字で『アホ乙、by先祖』とまで書かれていた。

俺の先祖共は何をやってんだ!!

「…ふう」

あまりの先祖共のアホさにため息をつく。

「さて…さっさと立ち退くか」

先祖代々の土地？ いったい何の事ですか？

「…どうですか？」

「違うよ、持ち方をもっとこう…」

駄菓子屋に戻ってみるとなんと信じがたい出来事が起きていた。

「そして…これをこう」

「…えい!!」

小娘社長が手に持つてる物、ありや確かけん玉とかいう玩具だ。

小娘社長がけん玉の球をうまくキャッチしようとする。

「…あ」

だが球は無情にもポロリとこぼれ、紐でぶらぶらとするだけだった。

「くっ…、こんなはず」

くやしそつに眉を細める。

「うーん…ちょっと、力を入れすぎてるかな」

そんな小娘社長をニコニコと微笑ましく見ているのはうちのバイトだった。

「ちょっと貸してみて」

バイトは小娘社長からけん玉を受け取り。

「もっしもっしかめよ、かめさんよ」

カンカンと小気味良くけん玉の球を回して受けていく。

「くっ…、も、もう一度」

それが納得いかないのか小娘社長はバイトのけん玉を強引に取り返し、再びチャレンジ。

「…あ、ああ!？」

そして失敗。

「…下手くそだな」

思わず声に出してしまう。

「…え？」

その声に気付いたのか小娘社長が俺を見て顔を真っ赤にさせた。

「も、戻ったなら戻ったといいなさい!!」

コホンと咳払いをし、腕を組む。

「いやあ、楽しそうだったもんで」

「単なる暇つぶしです！！それより早くこの土地を」

「お嬢様」

土地の話しをしようとする小娘社長の肩を黒星さんが掴んだ。

「何ですか？」

「お時間です」

スツと時計を小娘社長に見せた。

「…あ」

「なんだ？どうした？」

「すみません、スケジュールの都合上、我々はそろそろ行かねばなりません」

礼儀正しく頭を下げる黒星さん。

「うっ、しかし…黒星」

「コレ以上八午後ノ会議ニ遅レマス」

メイドロボもなだめるように話す。

なるほど、さすがに大企業の社長ともなれば分刻みのスケジュールなのか。

しかし俺はもうすでに立ち退くつもりでいるんだが…。

「この土地の事なんだが」

俺がそれだけでも言おうとした時、ビツとある物を突きつけられた。

「…え？何？」

けん玉である。

「買ったわ、いくらなの？」

小娘社長がけん玉を持ち、少し恥ずかしげにそう話す。

どうやら気に入ったらしい。

「まあいくらでもいいわ、はい」

小娘社長は当然のようにマネーカードを差し出す。

「……………」

「…どうしたの？」

「うちはマネーカードに対応してねえ」

「…何時代ですか？ここは」

いたって真面目な顔で聞く小娘社長。

「マネーカードの対応機械って結構高えんだぞ！買えっか！！」

「…うちに数百台はありますが」

貧富の差のバカ野郎！！

「小銭くらいあるだろ、小銭くらい」

けん玉だったってそんな高いもんじゃないし。

「…ありません」

無いらしい。

つまりマネーカードさえ無ければ俺は今現在、トランテクス（トランクス）の社長より金持ちなのだ、やったぜ！！。

……むなしい。

「お嬢様、ここは私が」

代わりに黒星さんが財布から小銭を取り出し、けん玉の代金を支払う。

「まったく…今時マネーカードが対応してないなんて」

支払いの最中にぶつぶつと文句を言う小娘社長。

「でも私はこっちの方がいいと思うな」

そんな小娘社長に話すのはうちのバイトだった。

「マネーカードだとピッと通して終わりになるけど…」

バイトは旧式のレジからけん玉のおつりを取り出し。

「はい、現金だところやって手渡しでおつりも渡せて…、人と人の交流も出来ますし良いですよね？」

「そ、そうかもしれないわね」

そうニッコリと笑うバイトに小娘社長が文句を言えるはずもなく、頷いた。

「つーかつり渡す相手間違えてんぞ」

支払ったのは黒星さんな訳なんだし。

「…へ？あ！！」

…遅いな。

「い、ごめんなさい／＼」

「構いません、私が後で黒星に返しますから」

小娘社長はそう言ってバイトからもらったおつりをマジマジと見つめた。

「小銭を持ったのは初めてかもしれないわね」

「…え？」

「な、なんでもありません！いいですか…この土地から必ず立ち退いて頂きますからね！！」

ビシッと俺を指差して小娘社長は店を出て行く。

黒星さんとメイドロボもスツと頭を下げ、小娘社長に続いて店を出て行った。

「え？あの…立ち退く、とはどういう意味ですか？」

バイトが遠慮がちに聞いてくる。

「文字通りの意味だろ、なんたってあのガキ、トランテクスの社長なんだぜ」

「じゃ、社長ですか！？」

目を丸くさせて驚くバイト。

そりゃあさっきまでけん玉教えてたからな。

「…ところで、トランテクスとは何ですか？」

「……………」

コイツは常識を知らんにも程があるな。

しかし、立ち退く事を言いそびれてしまったなあ。

「まあまた来るみたいだし、そんな時でいつか」

「あ！埋蔵金はどうになりました!？」

わくわくとした表情で俺に聞いてくるバイト。

「…ほれ」

俺はあえて多くは語らず穴から出た物をバイトに渡す。

「…コレですか？」

「それだ、つたく…ふざけた先祖だ、そんな雑巾」

「えつと〜」だが不知火の埋蔵金がある場所は知っている『」

「…あん？」

バイトは雑巾を広げ、そこに書いてある字を読んでいる。

「『不知火とはガキの頃からの付き合いだ、この雑巾がなによりの証拠になるだろう』」

「ち、ちよつと貸してくれ!！」

半ば強引にバイトから雑巾を奪い、文章を目で追う。

「『奴の本物の埋蔵金の場所は』」

「そ…、その場所は!?!」

バイトがゴクリと唾を飲み込んだ。

俺もドキドキしながら次の文に目をやる。

『この土地のどこかだ』

それにはこう書かれているだけだった。

「…もっと具体的なヒントとかねえのかよ」

「他に文章は無いみたいですね」

「つーか最初の一枚目だけで良いじゃねえかあああああ!?!」

結局進展は無し。

「…どうするかな」

土地を売つばらえば確実に金が手にはいる。

しかしその後埋蔵金が見つければマヌケもいいとこだ。

「…あの」

悩む俺をバイトが心配そうな顔で見つめる。

「ここ…出て行っちゃうんですか？」

ジツと俺を見る目は雨の日にダンボールに捨てられた子犬並みの威力があった。

「…はあ」

ため息が出る。

「やるか」

「…え？何をですか？」

「店に決まってるんだろ」

まあ…もう少し様子を見るぐらいいいだろう。

「と言われましても…お客さんが」

来ない。

失敗したかも。

5 (後書き)

書き終わってから気付いた。
黒星さん以外名前出てねえ

(

;)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6595g/>

近未来の駄菓子屋さん

2010年10月9日20時10分発行